

TOPICS
-5-トピックス…⑤
酪農ヘルパー海外研修で
ニュージーランド酪農視察

平成21年10月3日から10月9日の7日間、(社)酪農ヘルパー全国協会主催の「平成21年度酪農ヘルパー事業海外研修(ニュージーランド)」が実施された。今号では、研修に参加した本会総合対策課の本田航氏のレポートを紹介する。

● NZの酪農経営は設備の省力化が進む

今回、私たち参加者6人は、ニュージーランド北島の都市部オークランド近郊のハミルトンにある酪農家宅(Derek & Clair Finlay, Gordon & Wilma Finlay親子の2戸共同経営)にファームステイし、滞在中の1日、作業を手伝わせていただくとともに、近くのMarphona Farm(企業型大規模農場・ミルクプラント)、Desley & Steve McGougan牧場(中規模酪農家)、Penny & John Road牧場(肉牛用種牛繁殖農家)の3農場の視察を行った。

私が研修を通じて第1に感じたことは、各農場とも設備面から見ても省力化が図られている点だ。ニュージーランドの酪農は季節繁殖で放牧が主体ということもあり、牛舎は無い場合が一般的だが、搾乳施設等もかなり簡素化されている。滞在先のご主人に聞いた話では、大規模農場以外のほとんどの酪農家では「スウィングパーラー」が使われているという。これは建物の形状は日本で言うヘリンボーンだが、ミルクカーが中央の通路の1ラインにしか設置されておらず、この上から吊るされたミルクカーで両側を交互に搾乳する仕組みとなっている。滞在先では、搾乳を担当しているのは1人だけだった。また、仔牛への哺乳器なども多頭数対応で省力化が考えられたものが使われていた。滞在先のものは手作りだったが、ファーマーズショップでは同様のものが何種類も店先に並べられていた。

1頭当たり年間乳量は4,000キロ程度だったり、仔牛の出産は春先にまとまっていたりと、広大な放牧地を酪農の基盤としたニュージーランドとでは条件が異なるため、当然これらの設備がそのまま日本で使えるわけではないが、その省力化分だけ余暇を楽しもうといった彼らの精神面等を含め、多々感心させられるものがあった。

● 職業としての酪農の位置づけに変化

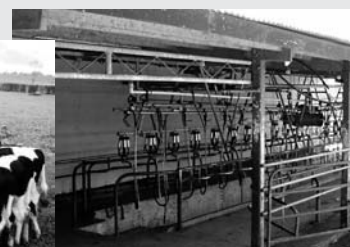
私がもう1点強く感じたことは、ニュージーランドは酪農国と言われているが、そこに住む人達にとって、職業としての酪農の位置付けは以前とは少しずつ変わってきているのではないかということだ。

訪問したDesley & Steve McGougan牧場のオーナーからの話だが、20年前に現在の100haの牧場を取得したときの購入価格は50万ドルだったが、現在では550万ドル程度(1NZドル=75円換算で4億1,250万円)に値上がりしているだろうとのことで、この状況は「クレイジー」と苦笑してみせた。ニュージーランドでは、息子が酪農家を継ぐ場合でも、親から土地や施設、牛等を購入しなければならないが、伺ったところ、「息子が自分の規模の酪農家にまでなるのはかなり難しいだろう」とのことだった。また、その牧場で働いていた19歳の青年にも話を聞いたところ、(彼の周辺限定での話ではあるが)人気の職種は手に職を持つ大工やエンジニアで、酪農は労働がきついということもあって人気はあまり無いという。

シェアミルクカー制度等により、就農の間口は日本よりは遥かに開かれてはいるが、色々な面で敷居が高くなってきているのだと感じた。

駆け足での見聞、かつホームステイ先では片言での会話ということもあり、正直、満足には言えないものの、私にとっては得るものの多い研修となった。関係の皆様には感謝を申し上げ、報告とさせていただきます。

▼手作りの哺乳機



▲スウィングパーラー